

特別賞

(熊本県教育委員会賞)

小さな思いやり

和水町立菊水中学校 二年 片岡 千知

私の祖母は障がいを持っている。手と足が麻痺し、思うように動かすことができない。普段は歩行器、外では車いすを使っているが、割と自由に生活している。そのためか昔から私は、障がい者を特別違う人と感じたことがなかった。

しかし、祖母も全く手助けがいらぬわけではない。毎朝、障がい者用の大きなベッドから歩行器まで行くのには、周りの人の手助けが必要なのだ。

ある日のこと、いつも祖母の介護をしている祖父が眼科に入院することになった。

「ばあさんの起きてこられんけん、朝だけヘルパーさんば雇おうか」

初めて二週間も家を空けることがよっぽど心配だったのだろう。祖父はヘルパーさんを雇うことにした。

それから数日して、寝る前に祖母の様子を見に行くと、祖母はいつもの定位置につくことができずにいた。

「ヘルパーさんが布団ば横にどけらしたもんで。やっぱ知らん人は分からっさんもんねえ」いつもはそのまま反対に二つ折りにされる布団が横にどかされ、分厚い布団が邪魔になっていたのだ。これには正直驚いた。私達にとっては些細なことでも、祖母のような障がい者にとっては重大な問題だったのである。

よくよく考えてみると私の普段の生活の中で、そういった心遣いは至るところにある。例えば、祖母は立ってシャワーを使うことができないのでイスを使う。でもそうすると体勢が低くなり、上の方にシャワーが掛けられていると届かない。だから、祖母のためにシャワーを使った後は、下の方に掛けておくというルール的なものがあるのだ。こんなに小さなことでも、祖母達にとっては大きな支えになっているということに初めて気付いた。

ある時、学校の福祉体験で精粹園という所に行った。精粹園とは知的障がいを持った人達の施設である。その中にもやはり高齢で歩けなくなっている人もいる。何か特別な介護が必要なのか？と身構えたが、

「じゃあ、その人達に付いて行ってあげて」

あっさりと言われ、それだけでいいの？とちよつと拍子抜けしてしまった。

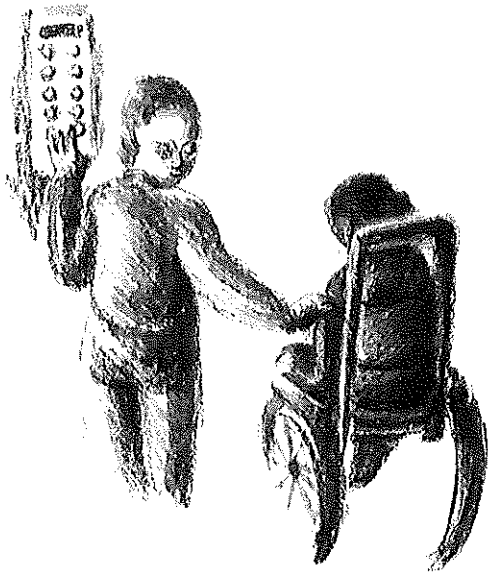
入浴の準備をしている時も、

「この人とこの人の服を準備してあげて・・・あ、その人は自分でできるからいいよ」

と言われた。人それぞれできることは違う。それを全て把握し、できるだけのことをさせている職員の方々はすごいと思った。それだけ一人一人のことをちゃんと見て、理解しているということなのだ。

これまでに挙げた体験は、私に「福祉の勉強をしなきゃ」とか「みんなが使いやすい物って何だろう?」とか思わせたのではない。何も知らない私でも、できることがあると教えてくれたのだ。障がい者だけではない。高齢者や小さな子供、妊婦さん達も多くの助けを必要としている。それらの人達が必要としている「助け」とは、大がかりな設備や専門的な知識などではなく、周りの人達の理解と小さな思いやりだと思う。

では実際、皆さんは困っている人に手を貸しているだろうか。「何となく恥ずかしい」とか「面倒臭い」とか思ったことがないだろうか。まし



てや差別や偏見の眼差しを向けたことがないだろうか。

今、中学生である私達が全国の全ての施設をバリアフリーにしたり、障がい者の方々の方がより快適に生活できるための物を開発したりするのは不可能だろう。しかし、障がい者用ではないエレベーターに車いすの人が乗って来た時、「何階ですか？」と訊いて代わりにボタンを押すことぐらいできるのではないだろうか。そして、そういった小さな思いやりが不可能を可能にし、理想を現実にすると私は信じている。